

氏名	SCHELLENBAUM Zoe Selane			
ヨミガナ	シェレンバウム ゴエ セラン			
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第688号			
学位授与年月日	令和4年3月25日			
学位論文等題目	（論文）遷るメタファー：アート実践によるゲニウス・ロキの探求 （作品）島の蝕			

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小山 穂太郎
（論文第1副査）	早稲田大学	准教授		里見 龍樹
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	ミヒヤエル・シュナイダー
（副査）	多摩美術大学	教授	（美術学部）	港 千尋
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田 盛一郎

（論文内容の要旨）

本論文は、人間と場所との詩的な相互作用である、ゲニウス・ロキの探求に焦点を当てる。現代美術と人類学の交差点において、映像人類学的なアプローチを採用し、研究を行う。論文自体が作品であると捉えられ、ニューカレドニア、フランス、日本の間で行われた旅、遭逢、芸術的実験の軌跡を辿る。

ラテン語で「場の精」を意味するゲニウス・ロキは、もともと古代ローマ人が特別な土地に祀った神や守護霊の存在を意味していた。時が経つにつれ、この言葉は新たな定義を得つつ、ゲニウス・ロキに新たな特性を与えるようになった。それは、建築物に影響を与える雰囲気、神話やアーティファクト、特異な儀式の創生を活性化させる力の流れ、ある場所で起きた複数の歴史的な出来事の結合、能動的な記憶、幽霊…こういったものを指すようになった。作家のAnthony Poiraudauは、我々は「場所のイメージの中に立っていると信じているとき」に、ゲニウス・ロキを感じるという。特別な場所に向き合うことで、その場所は、芸術が我々に予見させるイメージを、そして我々が記憶に留めていたであろうイメージを、突如呼び起こすかもしれないのである。目に見えず、無形で、変幻自在なゲニウス・ロキの存在は、具体性と仮想性の中で絶えず揺れ動いているようである。

第一章では、ゲニウス・ロキが現れる場所だけでなく、不可視なもののイメージを作ろうとする芸術家の実践を通して、この移動する現象のメタファー的な次元を探索する。例として、Claire Roudenko-Bertinの旅する石の返還、アーティストであり僧侶である羅入の儀式的パフォーマンス、筆者の祖父のアイコン制作などが挙げられる。

また、場所における目に見えない詩的な力の存在は、あらゆる文化において感じられる。つまり、ゲニウス・ロキは文化を跨る現象なのである。人の移動や交流を通じて、我々の物語やアーティファクト、慣習をある場所から別の場所へと繋ぎ、「dépaysement」へと誘う。

人類学者Anna Tsinのセレンディピティ的研究方法に影響を受け、筆者はニューカレドニアの鉱山において、カナックの人々、フランス人入植者、日本人移民を結びつけたニッケル採掘の歴史を再発見した。それは、ニューカレドニアでより大規模なフィールドワークを行う入り口となった。

ニューカレドニアでは、場所の記憶とそこに住むカナックの人々のアイデンティティが密接に関連している。彼らが住む土地の名称、口承の神話、先祖らの住む「見えない世界」との境界について語る夢の物語に、一族（クラン）の血筋の歴史を読むことができる。しかし、植民地化と福音伝道、ニッケルの採掘、大規模開発と気候変動による海面上昇を通じて、この詩的でメタファー的な場所との関係は、今や様々な問題に直面し、変容している。

Marilyn StrathernやAlfred Gellといったメラネシアを調査した人類学者の研究に支えられながら、第二章では、ニューカレドニアにおける空間性の概念を探求することによって、ゲニウス・ロキを研究する。この章を構成する旅行記のような文章は、筆者が行った旅や芸術的実験（パフォーマンス、エッセイ映画、翻訳の実験など）、ニューカレドニアの北東にあるウベア島の住民とのインタビューに基づいて行われたフィールドワークの経験を記述する。

この取り組みは、研究対象である行為を自ら行うことでその行為の原因を理解することを図るTim Ingold、およびメラネシア人によって行われたメタファーにまつわる慣行の再定式化を目論むMarilyn Strathernに依るものである。

本論文の結論として、最終章では、博士審査展のために制作された作品のプロセスを辿り、筆者はゲニウス・ロキと芸術作品の類似性について考察する。このどちらも、物質性と非物質性の間、現実と仮想の場所の間の、限りない

メタファー的な遷り変わりのプロセスの結果である。言い換えれば、どちらも数多くの翻訳の賜物である。ゲニウス・ロキは決して固定されたものではなく、イメージ、物語、身振りの流れ、そして時間と空間において作品の様相を曖昧にする絶え間ない変化という流れに巻き込まれている。人がゲニウス・ロキを見て感じることは、その動的な軌跡の中のほんの一瞬に過ぎない。それと同じように、作品が芸術的実践の過程で形を獲得して具体的になったと思われるまさにその瞬間に、作品はすでにその具体性を失っている。作品を成り立たせる素材や、作品が参照するものと作品が我々に喚起するものの構成は、即座に新しい場所へと無限に展開する。そして、この具体性と仮想性の間に翻訳を引き起こす「媒体」を研究することは、特に興味深い。作品を考えた場合、それはアーティスト自身に他ならない。

ゲニウス・ロキを、アート実践を通して研究し、逆にゲニウス・ロキの視点からアート実践を研究し、また、翻訳する媒体を問うことで、人間が住む場所や創造する場所との関係に新たな光を当てるのが、本論文の目的である。

#### （論文審査結果の要旨）

シェレンバウム氏の博士論文は、メラネシア（南西太平洋地域）のニューカレドニアを主なフィールドとして、現代世界における「場所性」の意義を探究するものである。論文は、紀行文、人類学的考察と芸術実践を融合した斬新で実験性の高いものとなっており、同じメラネシアをフィールドとする人類学者として、国際的に見てもおそらく類例がないその達成を高く評価したい。

メラネシアは、人々の歴史意識や社会的アイデンティティにとって、個別具体的な「場所」が重要な意味をもつことで知られてきた地域である。同時に、そのようなメラネシアの「場所」は今日、脱植民地化や天然資源開発、気候変動などによってその意味を激しく変えつつある。シェレンバウム氏の論文は、「ゲニウス・ロキ」をキーワードとして、現代のメラネシアにおいて「場所」が帯びているそのように動的な様態を理解し書きとめるという課題に取り組んでいる。

シェレンバウム氏の論文の達成は、一つには、「ゲニウス・ロキ」をめぐるそのような探究において、芸術実践（および、その人類学との融合）がもたらした有効性を示したことにある。たとえば、論文に組み込まれている詩的なテキストは、芸術実践を通してメラネシアの「場所性」を理解しようとする著者独自のアプローチとして精彩を放っている。また、同じく論文の中で記述されるメラネシアの友人たちとのやり取りには、この人々との深い相互理解を通して現地の「場所性」を体得しようとする姿勢がよく表れている。また、現地におけるそのような体験と人類学的議論を結び付ける仕方も十分に説得的である。

シェレンバウム氏の論文に残された課題を強いて挙げるなら、論文全体のテキストとしての完成度をいかにしてさらに高めるか、ということが挙げられるだろう。上述の通り、氏の論文を構成する個別のテキストはきわめて魅力的だが、論文の全体としては、それら個別のテキストをつなぎ合わせ統合する手法には改善の余地があるように思われる。そのような課題を踏まえても、氏の論文は、芸術実践と人類学的考察を一体化させた、国際的にも類例のない成果として高く評価することができる。

(作品審査結果の要旨)

The installation Zoé Schellenbaum has prepared in the lobby of the Tokyo University of the Arts Museum of Fine Art has been a fascinating culmination of her research and her individually developed way to communicate complex layers of perception of our existence as conscious humans within cultural, social, historical, political, economic, geographic and spiritual structures that are all in interdependence with the nature, the base for our being.

The lobby of the museum, a place of passage with multiple points of interaction for the visitor, does not allow the classical relationship between audience and art work.

Selecting this space for her presentation put emphasis on the transient nature of humans as individuals, as ethnical, economical, political or cultural communities as well as a species.

Within this space of passage, she placed a multi media installation, combining a multitude of communicative channels into a composition that led every aspect of her research into a manifestation through the dialogue with the audience.

Visually dominating the space was a triangular sail of several square meter that suggested a textile character, although it was made as a single sheet of paper. Built on the Japanese traditional method to produce „washi“, she combined South East Asian natural fibers with the remnants of Melanesian poems written on paper. Paper has been historically one of the signifiers of cultural leaps. While it is traditionally made of fibers that grow locally, creating a variety of different types and qualities of paper, it is a fully organic and natural product. Underneath the sail is the mold that was used to make the paper. The giant „suketa“ with its triangular form follows the example of traditional tools of paper-making while forming a boat at the same time.

Within the „boat“ is a mirror holding a clay hemisphere, sending light rays to the ceiling.

While the sail seems to give the boat the ability to move, it also forms the screen for a video projection. maps, images, videos, sound and text turn the surface of the paper-sail into a window of poetic projection of thoughts, impressions, emotions and memories.

The walkable spatial installation tells several stories that connect the audience to the insight gained by the artist through her artistic research. While scientific research even when done within an interdisciplinary setting has boundaries to the inclusion of topics and needs to limit the field of investigation per definition, artistic research has the opportunity to let a multitude of perspectives and investigative strategies combine to a holistic representation of insight and understanding.

Zoé Schellenbaum combines in her artistic research the biographical connection to New Caledonia with the historical research into pre-colonial and colonial past of the islands. The historical connection between Japan and New Caledonia, maybe not so present in the collective consciousness in Japan but vivid in New Caledonia, connects to her studies in Tokyo and her research into the Japanese culture. While cultural identity is not only defined by oneself, but also by the identification through the other, she is investigating the complex cultural, economic and political relations between the European, the Japanese and the native islanders culture without a predefined identity.

The interaction and collaboration with colleagues in New Caledonia, allow her to engage in a

partnership and to share authorship in her work. She arrives in New Caledonia during her fieldwork not as an anthropologist, but as an artist open to learn, to experience and to feel. While her research includes topography, geology, anthropology and history as well, it is the aim to build understanding through combination rather than judgement and categorization.

The opportunity for artistic research as practiced by Zoé Schellenbaum, to seek for serendipity and to follow traits that show connections even when they cannot be described within one classical field of research, allows her to reach into the cultural history, maybe unlocking ancient connections buried deep within the collective memory.

Walking through her installation, we are able to connect to the place, the history, the culture and the suffering of New Caledonia while understanding that the remote, tiny islands are not only a place to project paradise into, but one of the places where we see the problems of our time like under a magnifying lens. We are given the opportunity to gain access to this experience through the materials, the images, the text, the poems, the sound and the form. We can get closer through the ratio, utilizing the text and the documentation, or we can choose to follow our emotions when diving into the aesthetic of sublime display of insight into the reality of the human within the complex net of interrelationship that constitutes being.

The artistic work of Zoé Sélane Schellenbaum as displayed in the show of the doctoral program of the department of Western painting is an outstanding example of the possibilities artistic research offers within the wider cultural discourse. I fully support her being awarded the degree of a doctor of fine art for her extraordinary artistic achievement.

ゾエ・シェレンバウムが東京藝術大学美術館のロビーに用意したインスタレーションは、彼女の研究の集大成であり、私たちの存在の基盤である自然との相互依存関係にある文化的、社会的、歴史的、政治的、経済的、地理的、精神的な構造の中で、意識的な人間としての私たちの存在を、複雑な層の認識で伝えるために独自に開発した方法である。

美術館のロビーは、来館者にとって複数のインタラクティブポイントがある通路のような場所で、観客と作品の古典的な関係を許容しません。

この空間を選んだのは、個人として、民族的、経済的、政治的、文化的な共同体として、また種としての人間のはかなさを強調するためです。

この通過空間に、彼女はマルチメディア・インスタレーションを配置し、多数のコミュニケーション・チャンネルを組み合わせて、観客との対話を通じて彼女の研究のあらゆる側面を顕在化させる構成にしました。

視覚的に空間を支配しているのは、数平方メートルの三角形の帆で、一枚の紙として作られているにもかかわらず、織物のような特徴を持っています。日本の伝統的な「和紙」の製造方法をベースに、東南アジアの天然繊維とメラネシアの紙に書かれた詩の残骸を組み合わせました。紙は歴史的に見ても、文化的な飛躍を示すもののひとつです。伝統的にはその土地で育った繊維で作られ、さまざまな種類や品質の紙が作られていますが、それは完全に有機的で自然な製品です。

帆の下にあるのは、紙を作るための型です。三角形の巨大な "suketa" は、伝統的な紙漉きの道具を踏襲しながら、同時にボートを形成している。

舟の中には、粘土の半球を抱えた鏡があり、光線を天井に送っています。

地図、イメージ、ビデオ、サウンド、テキストが、紙の帆の表面を、思考、印象、感情、記憶を詩的に投影する窓にしています。

この歩くことのできる空間的なインスタレーションは、いくつかの物語を語り、アーティストが芸術的な研究を通して得た洞察に観客を結びつけます。科学的な研究は、たとえ学際的な環境で行われたとしても、トピックを含めるための境界線があり、定義に基づいて調査分野を限定する必要がありますが、芸術的な研究には、多くの視点と調査戦略を組み合わせ、洞察と理解の全体像を表現する機会があります。

ゾエ・シェレンバウム氏は、ニューカレドニアの伝記的なつながりと、ニューカレドニアの植民地化以前の歴史的な研究を芸術的な研究に結びつけています。日本とニューカレドニアの歴史的なつながりは、日本ではあまり意識されていないかもしれないが、ニューカレドニアでは鮮明であり、彼女の東京での研究と日本文化の研究につながっている。文化的なアイデンティティーは、自分自身によってのみ定義されるのではなく、他者を介したアイデンティティーによっても定義されますが、彼女は、ヨーロッパ人、日本人、そしてあらかじめ定義されたアイデンティティーを持たない島民の文化の間の複雑な文化的、経済的、政治的な関係を調査しています。

ニューカレドニアの同僚との交流や共同作業により、彼女はパートナーシップを築き、作品の著作権を共有することができます。彼女は、人類学者としてではなく、学び、経験し、感じるために開かれたアーティストとして、フィールドワークの間にニューカレドニアに到着します。彼女の研究には、地形学、地質学、人類学、歴史学も含まれていますが、判断や分類ではなく、組み合わせによって理解を深めることが目的です。

ゾエ・シェレンバウムが実践している芸術的なリサーチの機会、セレンディピティを求め、一つの古典的な研究分野で説明できない場合でも、つながりを示す特徴を追うことで、文化的な歴史に手を伸ばし、集合的な記憶の奥深くに埋もれていた古代のつながりを解き明かすことができるのです。

彼女のインスタレーションの中を歩くと、私たちはニューカレドニアの場所、歴史、文化、そして苦しみにつながります。一方で、人里離れた小さな島々は、楽園を映し出す場所であるだけでなく、私たちの時代の問題を拡大鏡のように見ることができる場所のひとつであることも理解できます。私たちは、素材、イメージ、テキスト、詩、音、そして形を通して、この経験にアクセスする機会を与えられています。私たちは、テキストやドキュメントを利用して比率によって近づくこともできますし、存在を構成する複雑な相互関係の網の目の中にある人間の現実を洞察する崇高なディスプレイの美学に飛び込むとき、自分の感情に従うこともできます。

西洋絵画学科の博士課程の展覧会で展示されたゾエ・セラヌ・シェレンバウムの芸術作品は、芸術的研究がより広い文化的言説の中で提供する可能性を示す優れた例です。私は、彼女の素晴らしい芸術的業績に対して、芸術学博士の学位が授与されることを全面的に支持します。

(Translation into Japanese for information purposes only)

日本語への翻訳は、情報提供のみを目的としています。)

#### (総合審査結果の要旨)

SCHELLENBAUM Zoéはフランスのナント美術学校在籍時からゲニウス・ロキ（土地の精霊）をテーマに研究制作を続け、東京藝術大学へ留学後も日本各地の場所と神秘的な事柄を調査する研究者や人々との交流を深めてきています。建築家の父親の仕事の関係で家族がフランス領のニューカレドニアに居住していた時にSCHELLENBAUMは生まれているのですが、自身の幼少期にいた土地にある種の運命的な動機を見出してその地の調査を始めています。そこでは戦時中の日本とフランスによるニッケル鉱物採掘の歴史に

触れる事になります。更に先住民の友人の調査協力を得て、その土地の人間の営みを深く知ることを通して、SCHELLENBAUM 自身によるフランス・日本・ニューカレドニア（メラネシア／南西太平洋地域）の3箇所を巡る“旅”の記録として本博士論文を書き進めてきています。ゲニウス・ロキを巡っての先住民の方々とその土地への繊細で丁寧なアプローチの下に、SCHELLENBAUM Zoé自身の非常に繊細なリサーチの過程と敏感な感応性が発揮された作品制作も含めてのアートの実践であり、特に本博士論文はたいへん詩的に語られた特異なもの、秀逸な表現になっています。

「うつるメタファー:アート実践によるゲニウス・ロキの探求」と題された本論文は第一部GENIUS LOCI/場の精、第二部ECLIPS OF THE ISLAND/島の蝕、第三部MOVING METAPHORS/うつるメタファー、の三部で構成されています。

中でも第二部の島の蝕では、特に時間に逆らって編集された様々な章が入れ込まれていて最も濃密な賞となっています。SCHELLENBAUMは、私の文章は、私の芸術的アプローチのセレンディピティ的な次元を借りる。つまり、ゲニウス・ロキが私の道に蒔いたような手がかりに従う、と述べています。偶然の出会い、偶然の発見を待ち望んでいて受け入れるのです。

SCHELLENBAUMは彼女自身が書いた詩をNeudjen牧師と一緒にフランス語からiaai語への翻訳を行い、それは歌になって博士作品の映像の中で歌われています。牧師との翻訳に係る会話のシーン、島を案内するウベア島出身のミシェル・ワイカタが海辺で顔の前に鏡を被せて反対側の景色・空を反映させている姿、ミシェルは白壇の木で島と老人を彫って海に侵食されていく島の記憶を訪れた人々に持ち帰ってもらうという、ミッシェルの彫刻という慣行について、SCHELLENBAUMは次のように綴る「白壇のようにミシェルは自身の複製となり、白壇のように自身のルーツを遠くに投影し、そうして思考において、彼の島と老人に似せ、彼は移動することができる。」

床面におかれた漉き舟と大きな手漉き和紙によって作られ、吊るされた三角形の船の帆には、ウベアの素材、文字が書かれた紙が漉きこまれていると云います。島から島へ渡る舟の帆に映像は投影され彼らは語られ、歌われて移動しているのです。

作品は移動し変形するイメージの偶発事であることをよく表しています。論文もたいへんなページ数になりますが、セレンディピティを発揮して様々な事柄がうつる（遷る）・変化するという取組になってその場所と遙か彼方の場所の接合への追体験も可能なほど面白く興味深いものになっています。語りのうまさも認めることが出来ます。作品と論文共にそのリサーチワークと詩的表現の方法が示した成果を高く評価して、学位を認定することを審査員全員の総意で決定しました。